DESK
Zentrum für Deutschland- und Europastudien, Universität Tokyo, Komaba
東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
Center for German and European Studies

DESK-Miszellen シリーズ第 5 号
2023 年 9 月

インターセクショナルな視点から見たドイツ
DAAD サマー・スクール参加記

瑞秀　昭葉

はじめに

2023 年 7 月 17 日から 21 日の五日間にわたり、キングス・カレッジ・ロンドンのストランド・キャンパスにて、DAAD サマー・スクール（以下、本会）が開催された。「世界の中のドイツ：困難な時代に交差する不平等（Germany in the World: Intersecting Inequalities in Challenging Times）」という題目のもと、ドイツ研究に従事する人文社会科学系の大学院生を対象に開かれ、最終的には、世界各国のドイツ・ヨーロッパ研究センターから文学、歴史学、政治学、人類学、音楽学、神学など実に多様なバックグラウンドを持つ総勢 25 名の研究者が集った。その意味で本会は、ドイツという共通の研究対象を、インターセクショナリティ概念に着眼して多角的に検討する最良の学術交流の場であったと言えるだろう。

本会は、初日は「社会階級」、二日目は「社会階級＆ジェンダー」、三日目は「人種／エスニシティ」、四日目は「移住」をテーマにプログラムが組まれた。パネルは全日程組まれ、その他にも、主催であるキングス・カレッジ・ロンドン、共催を務めたベルリン・フンボルト大学、リムリック大学の関係者を中心に、基調講演、朗読会、映画鑑賞会、ロンドン市内ツアーなど、実に多様なプログラムが実施された。最終日の五日目は、テーマは設けられなかったものの、後述するように、大学院生間での意見交換ワークショップ、出版社 De Gruyter 社の編集者による博士論文出版ワークショップが開かれた。本稿では、このうち特に印象深かったプログラムを中心に、サマー・スクールの様子を紹介したい。

インターセクショナリティ（交差性）とは何か

サマー・スクールの題目が示唆するように、本会での最重要キーワードは「インターセクショナリティ（Intersectionality）」であった。そのため、本会最初のプログラムに当たるリーディング・セッションでは、フンボルト大学の Marius Guderjan 氏のコーディネートのもと、このインターセクショナリティ概念の検討が行われた。

日本語では「交差性」とも訳されるこの概念は、アメリカ人法学者 Crenshaw によって 1989 年に提唱されたものである。Crenshaw は、当時のフェミニズム理論や反人種主義政策の言

説から、黒人女性の存在が周縁化されてきたことを批判し、3 つの裁判事例に即して、黒人女性の経験の多元性を可視化した。ここでは、黒人女性をめぐる差別は、既存の黒人差別や女性差別の枠組みで認識されるべきではなく、あくまで黒人女性差別として論じられるべきだと主張された。すなわち、インターセクショナリティとは、人種差別と性差別という異なる差別の単なる交差、あるいは総和ではないという点がここでの含意である。

本セッションでは、共通リーディングに基づいて、インターセクショナリティ概念の意味確認、また、その利点と批判点、さらに、参加者それぞれがこの概念を自身の研究にどのように応用できるかについて議論が交わされた。批判点として挙げられたのは、Crenshaw の理論的支柱であるアメリカの黒人女性の事例をそのままドイツの文脈に移植することはできないという点である。例えば、ドイツでは分析概念として、「人種（Rasse）」の代わりに、「エスニシティ（Ethnizität）」や「市民権（Staatsbürgerschaft）」、「国籍（Nationalität）」概念が用いられる傾向にある。また、「階級（Class）」に関しても、マルクス主義的伝統の有無という点で、アメリカとドイツは袂を分つ。

インターセクショナリティという切り口から、五日間にわたりドイツを考察するに当たり、本セッションは参加者がこの概念の射程と限界を共有する機会となり、幕開けとして相応しい内容であったと言えよう。

パネル

本会の要は、参加者による研究報告であった。10 のパネルに分かれ、25 名の大学院生が研究報告を行った。全ての報告について詳細に紹介することは、紙幅の都合上かなわないが、特に印象深かったものとして、Juli Zeh の小説における環境問題や、地方／都市の対立（これは旧東側／旧西側の対立も含む）を検討した報告（Fischer 氏、Steiner 氏）、ドイツ革命に焦点を当て、20 世紀のドイツ人女性の政治化を考察した報告（Hägerling 氏）、旧植民地に因んだ通りの改名問題に関する報告（Ram-Prasad 氏）を挙げたい。また、AfD の台頭とその活動も反ジェンダー、反イスラム主義、反ユダヤ主義などの観点から度々言及された（Burchett 氏、Montecchino 氏）。このように、個別の研究報告においても、ドイツの過去と現在、そして未来をめぐるインターセクショナルな課題が様々な角度から浮き彫りにされた。

筆者も、二日目のパネルで研究報告をする機会に恵まれた。「19 世紀末から 20 世紀初頭ドイツにおける男性同性愛解放運動」と題し、世紀転換期の同性愛解放運動が直面した困難

をインターセクショナリティ概念に焦点を当て発表した。具体的には、同性愛解放運動の旗手であったユダヤ人性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトに向けられた反ユダヤ主義と同性愛嫌悪が、オイレンブルク事件を通じて密接に結びつく様子を素描した。本報告では、ユダヤ性と同性愛の交差性に特に着目したが、フロアからは、当時の同性愛理解に内包された女性性／男性性、市民層道徳などにも眼を向け、議論を精緻化すべきだという大変ありがたい助言もいただいた。自身の研究を見直す契機となった。

基調講演、朗読会、セミナーなど

本節では、本会でのパネル以外の多種多様なプログラムを紹介したい。

まず、初日は「社会階級」をテーマに、上述のリーディング・セッションに加え、基調講演と映画鑑賞会が行われた。キングス・カレッジの政治学者 Christina Scharff 氏によって行われた講演では、インスタグラムにおけるフェミニストの活動が紹介された。その際に、各フェミニストの階級や、エスニシティ、母語の違いが当人の活動に与える影響が比較検討された。映画鑑賞会では、ドイツ人女性監督 Tatjana Turanskjy による 2010 年公開の *eine flexible Frau* が上映された。女性と仕事、ならびに、母子関係をテーマとしたフェミニズム映画である本作では、女性性が繰り返し問われた。

「社会階級＆ジェンダー」をテーマとして掲げた二日目は、フンボルト大学の文学者 Eveline Killian 教授による基調講演が行われた。ここでは、ブルデューやバトラー、エリボンなどを導きの糸として、ドイツ・英国・フランス文学における階級、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティをめぐる問題系が素描された。そのハイライトとなったのが、ロンドンを拠点に活動する作家 Isabel Waidner による 2019 年の小説 *We Are Made of Diamond Stuff* である。クィア、労働者文化、ナショナリズム、移民、ポスト・ヒューマニズムといった切り口から、本作品が重点的に検討された。また、同日には、カール・マルクスのロンドンでの足跡を辿る市内ツアーも敢行された。

三日目は、「人種／エスニシティ」をテーマに、ロンドンを拠点に活動するナイジェリア系ドイツ人作家 Olumide Popoola 氏を招いた朗読会が開催された。著作のうち、*When We Speak of Nothing* と新刊 *The Swimmer* の一節が著者自身によって朗読されるという非常に贅沢な時間であった。とりわけ、2011 年のロンドンに生きるアフリカ系の二人の青年を描いた前者は、人種主義、友情、青年期、クィア、ブラックネス、男性性、家族と言った多様なテーマの交錯を軽妙な筆致で描いており、フロアからも、子どもでも大人でもない青年について書

くことの難しさや、アフリカ文学として語られることへの思いなど印象的な質問が続いた。また、同日には、Constance Woollen 氏による「ブレクジットへの応答」と題した基調講演も行われた。

四日目は、「移住」をテーマに、キングス・カレッジの Nicholas Courtman 氏によるセミナー「戦後ユダヤ人のドイツ移住」、Christoph Meyer 教授による「ドイツと EU のウクライナ戦争への反応」、ウクライナ出身の作家でジャーナリストでもある Dmitrij Kapitelman 氏による朗読会が行われた。「戦後ユダヤ人のドイツ移住」では、ナチ期に行われたユダヤ人に対する帰化の撤回とドイツ国籍の否認、ならびに、「民族ドイツ人」に対して行われた集団帰化措置が、戦後ドイツにおいてどのように争点化されたかが法制史的観点から論じられた。

Meyer 教授によってウクライナ戦争への見解が示された後は、Kapitelman 氏による半自伝的小説 *Eine Formalie in Kiew* の朗読が行われた。本作では、キーウからドイツに移住したある家族の困難と対立がユーモアを交えて描かれる。質疑応答の際には、著者の言語との向き合い方（ウクライナ語、ドイツ語、英語）などが語られたのが印象的であった。

最終日は、院生ワークショップと、博士論文出版ワークショップの二本立てであった。前者では、博士課程の学生が抱える諸問題―教育と研究のバランス、メンタルヘルス、経済的問題、指導教員との師弟関係など―が参加者間で率直に語られた。後者では、De Gruyter 社の編集者によって、博士論文を書籍として出版する際の秘訣―書籍タイトルの付け方、プロポーザルの書き方など―が紹介された。どちらのワークショップも、前日までとは打って変わり、打ち解けた雰囲気の中で実践的な助言を受けることができた。また、欧米の博士課程の在り方や、出版文化に関する話はどれも興味深かった。

結びに

以上概観したように、本会では、ドイツを取り巻く多様な問題がインターセクショナリティ概念と共に多角的に論じられた。最後に、筆者が本会に参加した感想と今後の抱負について三点述べたい。

まず、本会は筆者の研究を発展させる重要な契機となった。実は、筆者はこれまで自身の研究をインターセクショナリティという概念を用いて検討することはしてこなかった。しかし、本会を通じて、次第に自身の研究にも十分応用可能な概念であるという考えに至った。そのため、今後は、本概念を自分の研究にも積極的に反映させていきたい所存である。

次に、本会での議論を通じて、日本独自の文脈についても検討してみたいという思いに駆

られた。日本でインターセクショナルな差別に直面してきた人々の存在を、日本独自の文脈に照らして―例えば、上野千鶴子の複合差別論との相違点などを検討しながら―、今後考察していきたい。

また、サマー・スクールの醍醐味として、国際的に活躍する研究者と知り合えたのは大きな喜びであった。異なる分野を専門とする研究者たちとの刺激的なディスカッションは、学際性の高い本会ならではの賜物であり、その全てが目が開かれるような経験であった。

このように、本会は筆者にとって実りの多い経験となった。最後に、この度のサマー・スクールの企画・運営に携わり、このような貴重な機会を提供するために尽力してくださった全ての方々に、この場を借りて感謝の意を申し上げ、本報告の結びとしたい。

（2023 年 8 月 21 日受理、2023 年 9 月 26 日公開　※DESK-Miszellen 編集委員会記入）